

UIFA JAPON NEWSLETTER



No. 87 May 25, 2011

■主な内容

災害と私たち UIFA JAPON
2011 年度総会+記念講演会案内
「女性建築家のパイオニアたちの肖像展」案内
特集 UIFA JAPON の現在
 ニュースレターの変遷から見る UIFA JAPON
 KIFA の歩みと現在
 KIFA 18 人の日本最新建築探訪
峯成子さんを偲ぶ
「大塚女子アパート」今和次郎賞受賞
災害見守りチーム活動報告

NL1号



NL87号



Japan's Disaster and UIFA JAPON 災害と私たち UIFA JAPON

UIFA JAPON 会長 松川淳子 MATSUKAWA-TSUCHIDA Junko

東日本大震災は、大地震、津波、原子力発電所事故が重なって日本全体を危機に陥れ、発災から2か月経ってもまだ収束地点が見えない大災害となりました。被災されたみなさまには心よりお見舞いを申し上げ、命を落とされた方々のご冥福をお祈りします。この災害に対する支援について、会をあげての取り組みは、当面、自分自身の被災経験の記録とそこから出る知恵の集約、義捐金の集約の二つしかできていません。しかし、個人では、自主的に、あるいは所属する組織の方針などに沿って、いろいろな取り組みをしています。被災地のがれき撤去や炊き出し、少しでも快適にすごせるためのお風呂づくりなどの直接的支援、大量に建設されていく仮設住宅への提言とモデル建設の支援、復興に向けてのあたらしいまちの在り方を模索する後方支援などです。

内閣府では昨年12月、第3次男女共同参画基本計画を策定し、今後とも力を入れて男女共同参画を推進していくべき分野のひとつに「防災」分野をあげています。被災された方の多くは高齢の方だったり、子どもだったりするので、男性はもとより女性も支援に加わっていることによって、より適切に支援の手が差し伸べ

られることはもちろんです。そもそも被災された方の半数は女性であると見ていいわけです。支援側にも半数の女性がいるべきでしょう。

UIFAの大会でも2004年のツールズ大会では、ヨーロッパの大洪水のあとを受けて、「災害と女性」が大会のテーマとなりました。女性の参画がどんなに大切か、大会宣言にも盛り込まれました。専門家的一端を担う者として、新しい役割も求められているようにも思います。

私たち UIFA JAPON のメンバーは、都市・建築をはじめとする空間の創造や研究にかかわる女性の集まる会として、この災害からの復興に向けての長い道のりを、被災地の皆様とともに歩むことを覚悟し、自分たちの出来ることはできる限りお手伝いしていきたいと思っています。小さな会ですが、だからこそ出来ることもあると思います。

会員皆様の知恵と力を集めて、この災害からの復興に対する支援の方法を考えていきたいと思っています。ご一緒に、被災地の復興への歩みを支援しましょう。

■ 第19回 UIFA JAPON 総会と記念講演会のお知らせ

19th UIFA JAPON General Meeting and Commemorative Lecture

日時：2011年6月11日(土) 13:30～ 2011年度 UIFA JAPON 定例総会
14:30～ 記念講演会

場所：キャンパス・イノベーションセンター東京(田町駅東口徒歩1分)

講師：ドナ・デュネイ ヴァージニア大学教授 (IAWA)

■ 「未来へー女性建築家のパイオニアたちの肖像展：IAWA 設立25周年を記念して」のお知らせ

For The Future: Pioneering Women in Architecture Exhibition

日時：2011年6月6日(月)～17日(金) 10:00～19:00

場所：建築会館ギャラリー(田町駅西口徒歩3分)

*6月6日(月)18:00よりギャラリートーク、ひき続きオープニングパーティーがあります。



IAWA の 25 周年記念展と連動して企画された「未来へー女性建築家パイオニアたちの肖像展」は、UIFA JAPON の歩みを振り返るいい機会になることでしょう。87 号を重ねてきたニューズレターをひもとくことによって、また、昨年みごとに UIFA 世界大会を成し遂げた KIFA について知ることを通して、UIFA JAPON の現在を捉えたいと考えました。歴史的な大震災とかかわるテーマについては、ニューズレターでも、今後、継続的にとりあげていきます。

UIFA JAPON Through Our Newsletters

ニューズレターの変遷から見る UIFA JAPON

田中厚子 TANAKA Atsuko

3 月 11 日の大地震による想像を絶した被災、余震、そして原発への不安は、これからの日本がどのようにあるべきかという重い課題を私たちに突き付けた。無力感と喪失感から抜け出して、復興に向かう今、UIFA JAPON もまた、より良い社会づくりを目指して行動する必要がある。UIFA JAPON の今後の活動を考える第一歩として、過去 15 年（1 号～86 号）のニューズレターを読み直してみた。今までどんな活動をし、どんなことを考えてきたのか。その時々を思いつきのようなテーマであっても、時代の空気や、一貫した姿勢を映しているのではないだろうか。

1992 年末に発行された第 1 号の中原暢子会長のあいさつには、「肩の力を抜いた国際交流がより地道に、少しずつでもその輪を広げていくことができますように、さらに若い方達が少しでも働きやすい環境を築き、次の世代のよりよい発展の捨て石ともなればと念じて、あえて会長をお引き受けした次第です」と書かれている。そもそも UIFA は、学会でも職能団体でもない、「肩の力を抜いた国際交流の場」として発足した。この「緩やかなつながり」という姿勢が、ニューズレターの特徴であろう。

1) UIFA 国際会議

記事として最も多く取り上げているのは、やはり「UIFA 国際会議」だ。2 号の「UIFA10 回南ア大会の報告」に始まり、2～3 年毎に開催される大会のたびに特集が組まれてきた。なかでも 1998 年の UIFA 日本大会の前後は、大会への意気込みが反映されている。大会のテーマ「環境共生時代の人・建築・都市」に関連した特集、大会の後援者へのインタビューを連載した「ザ・インタビュー」、「日本大会が終わって」と、ほぼ 3 年間の熱心な取り組みが記録されている。

その後も、「ウィーン大会」、「トゥルーズ大会」、「ルーマニア大会」、「ソウル大会」において、その都度大会テーマに沿った特集や、開催国の文化に関する特集を取り上げている。

2) 総会・海外交流の会報告

活動の骨格ともいえるべき、毎年 6 月に開催される「総会」および年 3 回の「海外交流の会」の報告は、当然のことだがすべて記録されている。「海外交流の会」の講演内容は、UIFA 国際会議のテーマと連動していることが多い。

3) 会員の自己紹介と活動報告

会員同士の理解と交流を深めることがニューズレターの目的のひとつなので、「自己紹介」は創刊当時から繰り返し記載されてきた。54 号から 63 号までは、「私らしく働く」というテーマで、会員の多様な仕事の内容だけでなく、働き方にも言及した。70 号以降は、「会員の仕事」というシリーズになり、16 ページの特集号（71 + 72 合併号）も組まれた。62 号から連載している著書の紹介「UIFA 会員の本」もまた、広い意味での自己紹介といえる。これらの記事は、吉田文子をはじめとするパイオニアたちへのインタビューや講演記録を含めて、女性建築

家の歴史的な資料になるだろう。

4) 海外の会員の活動報告

海外会員の紹介としては、ソランジュ UIFA 会長が最も多く取り上げられている。その他、日本大会で出会った海外の会員を中心に紹介したシリーズ「広がるレースワーク」が、36 号から 46 号まで続いた。この「レースワークをつなげる」という考え方は、83 + 84 合併号において、「人と人をつなぐ仕組み：レースワークを広げるために」と題した特集となり、日本の会員の活動（災害復興、ASWA 組、大塚女子アパート、三和町を語り継ぐ）を紹介した。

5) テーマをもった連載

38 号から「ユニバーサル・デザインを考える」という連載が始まった。これは 56 号まで続いた息の長い連載となり、UIFA 設立 10 周年記念行事の「ユニバーサル・デザイン写真展」へと展開した。その後、56 号から「学校トイレを考える」というシリーズが始まり、UIFA JAPON の自主活動グループ「ASWA 組」の活動へとつながった。また、新潟地震からの復興支援は、65 号から「災害復興見守りチーム」の活動として現在まで毎回のよう報告されている。

近年の大きなテーマは「リノベーション」である。76 号から始まった連載「魅力的なリノベーション」では、全国の事例を取り上げ、保存・活用の大切さを訴えるものとなっている。その原動力となったのは、60 号で特集した「大塚女子アパート保存活動」の残念な結果であろう。もう一つの大きなテーマは、「環境」に関するもので、「持続可能な水の安全」、79 号の「環境を活かす」、80 号の「環境を読む」、82 号の特集「森林と建築」などがある。

6) この指とまれ

広報部会が「この指とまれ」と題した見学会を始めたのは、35 号の「埼玉県立大学見学」からで、その後「江戸川アパートメント見学会」、「国際こども図書館」、「世田谷区立小学校のトイレ改修」、「堤防を守ろう栗橋体験」、「グループハウスほっと館見学」、「風の道・藤前干潟ツアー」、「日下部記念病院見学」、「小笠原伯爵邸見学」、「旧朝倉家住宅とヒルサイドテラス見学」、「三和町見学」、「新木場木材会館見学」などが行われた。

大雑把にまとめれば、「女性と建築」「ユニバーサル・デザイン」「リノベーション」「環境」などがテーマになってきたことがわかる。2003 年からは、毎年 1 回英文併記号とすることになり、「少子高齢化に関するアンケート調査」（67 号）、「東京オリンピックから北京まで」（77 号）のような特集が組まれてきた。最近のニューズレターは、会員相互の交流と活動の記録という創刊時からの役割に加えて、独自のテーマによる「特集」が増加する傾向にある。かつて会員に向けて発行されたニューズレターが、ウェブ公開を踏まえて外向きになっているのだろうか。ニューズレターの役割を再考する時期が来ている。

KIFA: Steps to the Present

KIFA の歩みと現在

李賢姫 Lee, Hyun-Hee

KIFA、正式名で Korean Institute of Female Architects (韓国女性建築家協会) は女性建築家の相互の親睦と情報交換を目的に 1982 年 2 月に創立された専門家組織である。当時、韓国建築家協会 (KIA) の事務局長であった李信玉 Lee, Shin-Ok の発議で、韓国の建築界では極少数の女性建築家である地淳 Chi, Soon、金行子 Kim, Haeng-Ja、千晒玉 Chun, Byung-Ok、金福守 Kim, Bok-Soo などを中心になって創られた組織である。少数の女性建築家として感じた同病相憐の気持の共有場と、KIA に相当する女性組織の存在必要に応じた結果とも言えよう。創立当時の会員の資格は大学 / 大学院で建築あるいは建築の類似学科を卒業した女性であった。UIFA との関係は KIFA の創立直後である 1983 年度から、正式会員国として指定され、李信玉初代会長は UIFA の理事として参加したのが始まりで、昨年には 2010 UIFA 総会を開催した。

何より、KIFA は建築を専門にする女性の集まりである。KIFA で建築とは、主に建築学科または建築工学科で学んだ建築に限定される傾向がある。即ち、家庭学科または住生活学科は含まれていない。現在は建築学科在学生の半分まで女子学生というが、それはごく近年の変化であり、以前は工大女子学生の存在さえ普通ではなかった。この背景で、KIFA の会員は学生の時代から工学系で男子学生と堂々と競争して生き残った人々である。その分、生存力もプライドも高い。前会長である裴是花 Bae, Si-Hwa さんは、この特徴こそ KIFA の原動力であろうという。他の女性団体に比べて現役の会員が多く、建設会社及び別の団体との関係も良い。その反面、閉鎖的であり、停滞しているように見える。これを乗り越えようと会長団は 2008 年 12 月から入会資格を緩和するなど、KIFA の新たな 21 世紀を整えている。会員資格の範囲を広げ、より多様な方面から建築を考えられるようにしたのもその一つである。毎年的一般人向けの住居文化講座及び建築相談、会員向けの Symposium、国内見学及び海外見学など、様々の活動を通じて 21 世紀の感性の時代に相応しい女性建築家を励ましている、それが KIFA である。(professor of Kyungwon University, Korea)

*原文のまま

(KIFA : <http://kifaonline.com/>)

韓国女性建築家協会の英文ホームページ。(写真は吳慶恩 Oh, Kyung-Eun 第 9 代現会長)

李賢姫さんは『異文化の葛藤と同化—韓国における「日式住宅」—』(1996 年 建築資料研究社)の主要な著者であり、このテーマで博士号(東京大学)を取得している。

KIFA: 18 Members Visit Japan

KIFA 18 人の日本最新建築探訪 中野晶子 NAKANO Akiko

昨年の UIFA SEOUL でのきめ細やかな組織力を結集した国際会議に、私たちは大きな感謝の念を KIFA に抱きました。その KIFA 会長以下 18 人が日本の最新の建築の視察に訪れました。

2 月 4 日(金) 羽田新国際空港 KIFA18 名着。バスですぐさま山本理顕設計の横須賀美術館に来館し広報スタッフ 3 人が出迎え。地階の展示室、図書室、谷内六郎館、屋上展望デッキからの巨大タンカーから小舟までが行き交う浦賀水道を手前に千葉を望む。造船技術の巧みなこの土地がら、鉄板曲面溶接でエンドレスに壁と天井をつなげた内部空間に、潜水艦のイメージがあるとの感想が飛び出す。屋根も外壁もガラスで被覆された二層構造に、「熱気をどう逃がすのか」などの疑問を抱えて、横浜みなとみらいの理顕事務所を尋ねると、山本氏はにこやかにそれぞれの質問に答えてくださった。旧倉庫をリノベーションした事務所には、総勢 30 人ほどの所員が中国や韓国でのプロジェクトも進行させており、随所に模型(1/30〜)のある所内を真剣に見つめて廻った。

大さん橋、赤レンガ倉庫を見学の後、UIFA JAPON 主催の SCANDIA での歓迎夕食会では、韓国語も飛び交って昨年の大会を懐かしみ、それぞれが挨拶を交わした。日本からは 11 名の参加があった。

2 月 5 日(土) 午後から同行し、神奈川工科大学の KAIT 工房を見学した。無数のランダムに配置された厚みの違う鉄のフラットバー(幅 12cm、白)の柱が、荷重を支えたり引張応力を担ったりして、林のようにエリアを分けている。ピン接合、剛接合の話に及ぶと、柱の基礎への締結方法まで質問は迫った。学生のセルフ実験場として、溶接、陶房、木工などの様々な工作機械とアトリエが、外皮=ガラスに守られている。

江戸東京たてもの園へは、土曜日の郊外の渋滞にまきこまれたが、大正、昭和の、都内から移築してきた建物による街並みを含めた保存再生のあり方を見学することができた。日韓の民家の違いをもっと知りたいという声もあり、時間が過ぎても熱心に写真をとる姿がみられた。

4 日間の滞在の後半は、丹下の東京カテドラルや代々木競技場を含む、六本木、青山、銀座界隈を広報のリストアップも参考に自力で見学され、小川名誉会長とも再開を果たした一行は、無事帰路につかれた。



KAIT 工房見学風景

(写真 田中)

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

発行 2011年5月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866

峯成子さんを偲ぶ

田中美恵子 TANAKA Miekko

去る1月12日、チャージングでユニークだった、峯成子様のご逝去されました。

パレピー国王妃招待の下に開催されたUIFAの国際会議に出席されて以来の会員でした。大学卒業後、直ちに建築研究所に入所、主に住居経済のご研究に熱心に携われた。その後大学に移籍、後進の指導に当たられた。大変な読書家で、文学少女の頃は詩歌を誦んじ、3～4年前にはダーウィンの“種の起源”を読破したと伺ったが、文学からミステリー、漫画、クロスワードパズルまで多岐に亘った。又、静かな酒豪で肴にもグルメ。何処かで美味しかったお料理は、必ず作ってみる等と好奇心の塊だった。若い日に結核で療養生活をされたとは思えない程元気で、スキー・ドライブ・一人登山も楽しまれた。“すみの会”では彼女を髣髴とする可愛らしい人物像を拝見した。ご自分でも、まだまだ元気だと信じて居られた様であったが、奇しくも幼稚園から大学まで通われた目白駅近くが終焉の地となった。成子様有り難う。ご冥福をお祈りします。



■「東日本大震災へのUIFA JAPON 義捐金」へのご協力ありがとうございました。4月末までに423,000円となりました。支援先については検討中ですが、まず5万円を小島久実委員より紹介のあった「ユー・アイ・アソシエーション」に送金しました。(当団体は伊丹市のボランティア団体で阪神大震災を機に活動をはじめ、震災翌年から犠牲者と同じ数の6343本のろうそくを灯す追悼行事などを実施、今回の災害ではがれき撤去などに協力している団体です。)

■災害見守りチーム報告

安武敦子 YASUTAKE Atsuko

東日本巨大地震で被害に遭われた皆様に心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。災害復興見守りチームでも今後の活動について検討しています。被害エリアが広く、支援内容も多岐にわたるため、UIFA JAPON 義捐金の送付先・支援方法についてボランティア参加報告会や研修等を実施しながら考えていきます。アイデア等お寄せ下さい。報告会開催等のお知らせはミニニュース等を通して行います。またミニニュースで案内した「そのとき私は・・・そして私は今」のアンケートへは関東の方を中心に29名の方に回答いただきました。たくさんの示唆に富む内容がありました。後日結果を報告します。

支援を続けている新潟県の法末集落へは、3月7日～8日、2つの大学が協働して雪掘りボランティアを実施しました。駒沢女子大学から榎本文夫先生と学生19名、ものづくり大学は河内眞作先生と学生6名、それに私の総勢28名で、今季は交通費も宿泊費も自費でしたが多くの学生が参加しました。雪掘りは2組に分かれて、キャンプ場や3軒の家屋、我々の拠点施設「へんなカフェ」を除雪。ものづくり大学の男性陣が加わったため効率よく実施することができました。また今季は豪雪のために募金活動も行いました。ご協力ありがとうございました。豪雪処理に使用するガソリン代の一部にと寄付いたしました。

■「同潤会大塚女子アパートメントハウスが語る」が「今和次郎賞」受賞

女性と住まい研究会が、長い時間と議論を重ねた労作であるだけに大変うれしく、受賞式5月14日、記念シンポジウムを7月16日。記念シンポテーマ渡邊(案)「東日本大震災と同潤会の知の遺産―復興に新時代を予感させた大塚女子アパートメントハウス再考―」関東大震災後、同潤会が、“かつてできたこと!がなぜ今、復興に向けてできないか”。新しい暮らしの場を創生するために、再び議論を深めたいものです。詳細ご案内は追って。

(渡邊喜代美)

■海外交流の会延期のお知らせ

2011年3月26日に予定されていた第52回海外交流の会「未来の学校建築を考える」は震災のため延期となりました。開催時期は未定です。



公民館の除雪風景
—1階はすっかり雪に埋まっている—



ちょっと休憩
—村の方の感謝の言葉で元気になりました—

■役員会報告

第11回2月17日(2011年)パイオニア展UIA千人茶会の準備、NL第86号の進捗、87号の企画、KIFAツアーについて、第52回海外交流の会準備確認、第18回総会準備について、災害見守りチームから法末の積雪対応、オープンガーデン事業助成について、ASWA組から報告書作成について、パイオニア展PTから進捗について報告。第52回海外交流の会チラシ内容、HPへの掲載、タイムスケジュール、KIFAツアー経費について、飯島氏寄付への対応など協議。
第12回3月23日(2011年)パイオニア展及びUIA千人茶会の準備、ミニニュース及びKIFA報告書、飯島氏寄付の礼状発送、海外からの見舞い状受け取りについて、会費及び韓国大会記録集の入金状況、NL87号の企画、パイオニア展チラシについて、第52回海外交流の会延期について、災害見守りチームから雪掘りボランティア及びカンパについて、パイオニア展PTから後援依頼について報告。NL87号の定期発行、第52回海外交流の会開催時期、韓国大会記録集の発行部数について、東日本大震災対応について、会員からの告知対応について、ASWA組報告書作成経費など協議。
第14回4月21日(2011年)会員の退会、パイオニア展、UIA千人茶会の準備、ミニニュース発送について、東日本大震災義援金及び韓国大会記録集の入金状況、NL第87号の企画及び進捗、パイオニア展チラシについて、第52回海外交流の会開催について、災害見守りチームから活動について、ASWA組から次年度予算について、パンフレット委員会から活動報告及び計画について、パイオニア展PTから進捗について報告。韓国大会記録集の表紙及び担当について、総会について及び資料の作成準備についてなど協議。

■編集後記

私たちに何が出来るか…。提案出しが始まりました(井出)。スマートグリッドなど、エネルギーが街づくりのキーワードの筆頭になりつつあります(須永)。GWは個人邸庭施工で職人パラダイスでした(飯田)。4月より編集に参加しております、ピッカピッカの新人生です。よろしくお祈りします(薄井)。1992-2011NLにわーお! 11/3/11にどう寄り添うか! 専門家エゴに陥らない自分を磨こう(渡邊)。大震災支援活動で言葉を失う自然の脅威、被害者の方々の悲しみに触れました。小さくても私なりのお手伝いを続けます(黒石)。桜も新緑もいつもと違う色に見えた2011。日本の節目の年になりました(在塚)。